令和４年度横浜市地域福祉保健計画　策定・推進委員会　分科会１　第２回	
日　　時	令和４年９月21日（水）15時00分～17時00分
開催場所	横浜市役所18階共用会議室　みなと４・５会議室
出　席　者	対面参加：生田委員、宇野委員、佐藤委員、塩田委員、名和田委員、佐伯委員、 福本委員、山野上委員（８名） オンライン参加：なし
欠　席　者	内田委員、内海委員（２名）
オブザーバー	健康福祉局地域支援課、健康福祉局地域包括ケア推進課（欠席）、市民局地域活動推進課
開催形態	公開（傍聴人０名）
議　　題	議事【議事１】第１回ふりかえり 【議事２】意見交換 （１）多様な世代や様々な人々が、身近な地域の中で活動に参加し、つながっていくために必要な考え方、進める上での課題、支援機関に期待することとは （２）地域のつながりを活かして、地域の福祉保健活動へと広げていくために必要な考え方、進める上での課題、支援機関に期待すること 【議事３】まとめ
議　　事	開会 （事務局）資料１、資料２（資料２－１、２－２）資料３、資料４、参考資料について、配布資料の確認 議事 **【議事１】第１回ふりかえり** （事務局）資料２－１、２－２の説明 **（名和田委員）** 資料２－２では、個人がどのように地域や諸団体とつながっていくかという局面についての意見が多く出ており、これは事務局にとってもありがたいことだったと思う。本日はこの点について、さらに掘り下げてご議論をいただきたい。内容については「議事２．意見交換」でご報告いただく。 資料２－１団体・組織の連携協働について、何か質問や意見はあるか。 （意見なし） ありがとうございます。 私は、第１期から継続してこの地域福祉保健計画（以下、地福計画）の委員会に携わっているが、第１期を振り返ると、障害分野については、つながるにしても地域も非常に慎重で、障害当事者側も身近な地域とのつながりを避ける傾向もあったように思う。今もその構造は全面的に解消されたわけではなく、残念ながらまだ地域には色々な課題があると思われる。しかし今回第５期地福計画の策定に向けては、この問題があることを踏まえながらも、前向きに関わり方について検討したいと変わってきているように感じた。

	【議事２】意見交換 **（事務局）**資料２－２、資料３、資料４の説明 **（名和田委員）** 説明していただいた議事２について、分科会メンバーや事務局、オブザーバーの方も含めて意見交換をしていきたい。基本的には資料４－１の図を見ながら、その他の資料を参考にしつつ、意見交換を進めていけるとよいと思う。 参考資料「地域共生社会とは」については、皆さんご存じの通り厚生労働省から発信された言葉であるが、横浜の地福計画の理念とも合致するものであり、我々自身の言葉とするためにも、この場で共有をさせていただいた。 意見交換については大きく２つに分かれており、問２にあるように、どのようにして地域福祉保健活動に関わる人たちを広げていくかということが、この分科会１のメインテーマである。 資料２に前回の分科会で議論した内容がまとめられているが、問１については、前回の分科会である程度意見交換をしているので、前回言っていなかったことがあれば、ここで補足的に出していただきたい。資料４－１の図にあるように、①のまだ地域と関わりを持っていない人たちが、どのように②の地域のサークル活動や③の福祉保健活動に入るのかという局面の話だとお考えいただきたい。 **（山野上委員）** 資料４－１の図について、私の感想であるが、共生社会、支えあいとなっているが、いつまでたっても図の中心に「支えてもらう人」がいる。誰かを支えられる人は支援が必要な側にもいるし、地域のサークルの中にもいる。また、支援が必要な人は、意思の伝達やコミュニケーションの問題もあると思うが、成年後見制度やコミュニケーションツールを使うことで、支援が必要な人たちも①、②に存在しているという絵が描けるとよい。普段から表現の仕方を悩んでいるが、そのようなことも検討していただけるとよい。 **（名和田委員）** この図の中心にある、支援が必要な人というのは確かに位置づけが難しい。「支える、支えられるという関係を超えた」ということは最近よく言われており、少なくとも、①、②、③のどこにも支援が必要な人たちがいて、場合によっては支えている。そこをどのように表現すればよいか。事務局も悩みながら図を作成したと思うが、何かご意見はあるか。 **（事務局）** ありがとうございます。ご指摘いただいた点は、資料作成の中で事務局としても一番悩んだ部分であった。議論の意図をより明確にするためにこのように表現させていただいたが、ご意見の通り、①、②だけでなく、③の担い手の中にも障害のある方がいて、自分ができることを意欲的に発揮していただいている。そうした支え手・受け手を超えた関係性に向けて、どのような工夫や考え方が必要なのか、ぜひその点にも踏み込んで皆様からご意見をいただきたい。 **（福本委員）**

	子育て世代の観点からお話をさせていただくと、良い悪いは別として、子育て家庭が置かれている状況は非常に忙しいと思う。収入の層により違いもあると思うが、物価の高騰などもあり、働くことが前提になっている。子育てのために働かないと暮らしていけない、仕事をしているために時間がない、子育てと仕事でとても疲れているという現状の方もいる。このような状況が現在の子育て家庭の背景にあると思う。子育て家庭は、休みの日を家事や、子どもと一緒に遊ぶ時間、翌週のために体を休めることに充てており、地域と関わる時間を持つことはなかなか難しいと思う。 現在、地域子育て支援拠点のメインユーザーは、子どもの年齢が０～１歳の保護者となっており、子どもが２～３歳になると急激に少なくなる。０～１歳児の親に、いかに地域とつながることが大事かを伝えることはとても難しい。 また専業主婦の場合も、父親が仕事で忙しいと、ワンオペで育児をしている。そうなると、地域でどのような福祉活動がされているかを知る時間もない。町内会で回覧版が回ってきて、イベントごとの情報をキャッチしても、そこに自分が担い手として関わるというところにはまず行かないと思う。 そこで私たちのような子育て支援拠点が、地域ケアプラザや町内会の皆さんと交流することで、子育て家庭の方たちが住んでいるまちの様子を伝えていくことがとても大事になってくるのだと思う。それがきっかけで地域の主任児童委員の子育てサロンや、親子サークルの入会につながったというケースもある。子育て家庭が、地域ケアプラザや町内会とつながったり、町内会の役員と顔の見える関係になると、少し興味を持って地域活動に参画していくのではないかと考え、その種まきのようなことを意識して活動をしている。 **（塩田委員）** シルバークラブの立場から、どういったことにつなげていけばよいのかという観点でお話をさせていただく。問１について、３点に整理をした。１点目は、それぞれの住民が情報を共有できる場、１回、２回ではなく継続できる場を作るということ。私どもでは、毎朝皆で体操や散歩をする活動を10年間続けている。小さな地域ではあるが、参加者は年間延べ約6,000人である。活動の中で、日々の出来事を皆で話しているが、この中から出てくる情報というのは非常にリアルなものが多い。これらの情報を地域の中で活かしていくことは非常に大切なことであり、今後も続けていきたいと思っている。 また、ある活動参加者から、昨日特殊詐欺の連絡があったが、警察と連絡を取り被害を未然に防ぐことができたという話があった。他の参加者約20人と、被害を未然に防ぐことができた要因について共有できた。集まりの中から情報を一つ一つ共有できる場を作ることが何よりも大切ではないかと思う。 散歩の会、体操の会、サロン、映画鑑賞会も実施している。月に１回実施しているが、このような場を使って話し合いもできる。要するに、情報を共有できる場を作り、その中から出てくる情報を活かすということを継続して実施していくことが、一番の基本になると思う。 ２点目は、シルバークラブは高齢者の集まりであるが、過去の肩書がどうしても

	出てくる場合があり、これが非常に問題となる。過去の肩書も経歴もない集まりという観点も非常に大事だと思う。 ３点目は、高齢者の分野においても担い手不足の問題はあるが、私が常に言っているのは「アクティブシニアであれ」、「アクティブシニアでいこう」ということである。元気で明るい高齢者ということだけではなく、今まで生きてきた経験を活かして、エネルギッシュに物事を捉えて前に進める、積極的に一歩前に出る行動を起こしていくように、それぞれの役を持ち、結果として、皆さんから喜んでもらえる生きがい、やりがいを作っていこうではないかということを言っている。 様々なことがあるが、皆で一緒に情報が共有でき、肩書も同じレベルで、そしてアクティブに物事を進めていくということが、活動に参加してつながっていく上で非常に重要なことではないかと思う。 **（宇野委員）** 資料４－１の図について、支援が必要な人というキーワードを見たときに、一般的には障害者や高齢者が思い浮かぶと思う。しかし実際は、先ほど福本委員がおっしゃったように、大変忙しい人などもそこに入っていて、そこまでをイメージ的に描くことができれば分かりやすいのではないか。または、高齢者も子どもを支えられるといったことが見えると、さらに分かりやすいのではないかと思った。 もう１点は、資料４－１①→②、③に人が移っていくときに、どのようなことが必要なのかを考えると、気持ちは持っているが行動に移せない人が大半なのではないかと思う。それは恥ずかしいという気持ちや、単純に時間がないということもあると思うが、そうした気持ちを酌み取り、後押しをしたり、引っ張っていくリーダーのような存在がいなければ、なかなか動いていかないのではないかと思う。 理想のリーダー像を考えたときに、相談したくなる、熱く、愛がある、人を乗せてあげるのが上手、推進力があるが何か憎めない、そのような人を色々なところに配置して、その人たちが動けるようになると、現実的に動いていくように感じた。 一方で、そのリーダーにも自分の生活があり、どれだけリーダーを作ることができるのかという問題もある。金銭面での支援や、例えば学生であれば、そこで得た経験を評価していけるようにする等、若いときの感覚を活かせるとよいと思う。 **（名和田委員）** 若いときの感覚と言われてはっとした。現在、港南台で市民活動に携わり、その年中行事にキャンドルナイトがある。ここ５年ぐらい、横浜南陵高校社会福祉部の学生が実行委員会に大勢参加している。学生たちがどういう動機で入っているのかはまだ分析できていないが、やはり何か楽しいということが根底にあることは確かで、月に１回の実行委員会に必ず来てくれる。宇野委員がおっしゃった若いときの気持ちについては、我々はもう忘れてしまっているが、そこを注目しなければならないと感じた。 福祉の世界では、生涯学習活動をしている人たちにはあまり支援が入ってこない。実際には、区や地域のレベルだと生涯学習グループは市民活動グループの一類型のようにみられていると思う。②の中にも生涯学習を行うグループは存在する。生涯学習、社会教育の分野でもグループの形成が非常に重要視されているようだ。

①→②に移行していくときの一つの経路として生涯学習グループを作る、そして地区センターの講座などでもそういうグループ形成を促すというのが指定管理者選定のときの一つの売りになっている。その辺りの関係で何かご知見はあるか。

（オブザーバー）（市民局地域活動推進課）

市民活動支援センターの直接の所管ではないので、私もあまり言える立場ではないが、趣味をきっかけに仲間づくりをすることで活動に広がりができ、その活動をさらに発展させて地域にも還元していけるようにすることが社会教育と考えている。趣味で終わらせずにぜひ地域に還元していただきたいという話はよく出ている。

（名和田委員）

資料４－１の図でいうと、②→③への話だと思うが、その方向が中央教育審議会で出たのは1999年頃で、その後の横浜市の生涯学習推進指針で早速反映されている。他の自治体では公民館やコミュニティーセンター、横浜市では地区センターやコミュニティハウスのグループ形成からさらに、市民公益活動に向かっていくといったベクトルが政策的には追及されている。福祉分野でもそれは遵守されるべきだと思うが、私自身はそこの道筋がよく分からない。なぜ②→③に行くのかをアンケート調査で分析しようとしても、なかなか②→③に行くというベクトルは出てこない。それについては、本日皆さまのお知恵から手がかりが得られるとよいと思ってる。

（名和田委員）

現在、問１（資料４－１①→②、①→③）について議論をしているが、他に意見がなければ、問２（②→③）の議論にシフトしていきたい。

（生田委員）

現場の感覚としては、ケアプラザでも実際この概念があり、福祉保健団体、それ以外の趣味団体といったカテゴリーがある。ただ、地域の方々と関わっている現場としては、正直②と③の間に明確な違いがない。どのような団体であっても、地域に多くの良い効果を与えている。地域では趣味活動など、例えばフラダンスや社交ダンスなど、その時その時で様々な活動が出てきて、その中で活動に陶酔したり、教えたり広めたいという思いを持った方が地域で活動を始める。皆で集まることで社会交流もしていて、とにかく体を動かして元気になっている。これは立派な認知症予防、介護予防であると思う。団体の方々は自分たちで楽しむ、体を動かして元気で良好だという思いはあるが、②の団体が違うのは、②の団体は福祉保健活動をしているという意識が希薄である。しかし実際は十分にしている。

話は変わるが、趣味で習字の活動をしている団体があり、高齢者の習字活動も認知症予防ということで市民活動をしている。そこに車いすの方がメンバーに入ってくると、皆で一生懸命送迎をしてその方を受け入れている。それはもう十分福祉活動だと思うが、団体の中では、ただ仲間が来られないから一緒につき合ってきたという意識しかない。そのような意味では、割と②と③は心の持ちようというか、団体の内容というよりは団体がそれを踏まえているかどうかだけで、実際はほとんどの活動が地域の福祉保健活動になるのではないかと思っている。

楽しんで活動していることも福祉保健の活動、何らかの支援が必要で行くこと出来

	ず困っている仲間を受け入れただけで、十分満たしていること等、その意識を伝えていくことが大切。今の活動でも十分に福祉保健活動だということを団体に理解していただけるとよい。特にそういう会を始められるような方は、元々リーダーシップもあり、熱い方が多いので、そうした人に理解していただき、内容的には変わらなくても結果として福祉保健団体という形になればよいのではないかと思う。 **（名和田委員）** 　アンケート調査でクロス分析をすると、生涯学習団体とそうではない団体では明らかに回答傾向に統計的に有意な差がある。しかし、ある局面では、②と③の移行が頻繁に起きていて、福祉保健活動をしていると言えるような局面があり、常に行ったり来たりしていると見るのが正しいかもしれない。 **（佐藤委員）** 　私は自治会町内会の担当であるが、自治会では全てのことをしなければならない。極端な話だと、横浜市の方針、区の方針を地域に持ってきて、皆で共有しながらよいまちづくり、いつまでも住んでいたいまちづくり、それが私たち自治会町内会の大きな目的である。 　ここで改めて福祉活動とは何かということで、どういう話をしたらよいか非常に悩んでいる。私たちからすれば、福祉も確かに我々の範疇であると感じている。この資料４－１のイメージ図の②に私たちの地域では13のグループがある。その中に交通対策部があり、月に１回交差点に立って交通安全を呼びかけ、子どもの登校時には見守りを行っている。この活動も広く言えば福祉という感じもある。こども食堂を実施したり、少年少女の消防クラブやパパ友の会を作ったり、学校運営協議会という組織など、色々な組織の中で、それぞれが福祉というより、この地区に住んでよかった、長く住みたい、困ったときにはどこへでも相談できるというまちづくりが私はキーだと思っている。そのために区社協や、ケアプラザなどで色々な相談にのっていただきながらまちづくりをすることが、福祉であると感じている。 　先ほどシルバークラブの方からお話があったように、皆さんで集まり、話し合いや歌を歌ったりという活動を何十年としているが、活動を続けながら、このまちに住んでよかったということを見つけ、やっていけばいいのではないかと思っている。 **（名和田委員）** 　このまちに住んでよかったと思えるような観点でやっておられれば、それはもはや単なる遊びではない、福祉保健活動だと思う。そのようなことを地域をあげて、地域全体でやっていらっしゃるということは、見本のような地域福祉活動ではないかと思う。どうすれば他の地域でもそのようになるのか。担い手不足がよく言われるが、佐藤委員の地域ではいかがか。 **（佐藤委員）** 　私の地域では、子どもの頃から皆、顔のつながりがある。私は他の地域から来た人間であるが、最近になって、名字でなく名前で呼ばれるようになってきたので、地域の人間になってきたのかなと感じている。 **（佐伯委員）** 　福本委員のお話を聞いて、自分の子育て時代も全く同じだったと感じた。子ども

	が小さいときは時間がなく、いつも疲れていた。月１～２回土曜日の朝７時半に集まり、公園の掃除をするという活動があったが、参加するのも本当に疲れて大変だった。 　ただ、福祉活動に関わる時間はないが、集える場所が設定されているとよいと思う。公共の場所で、例えば集会所、ケアプラザ、区民センター、図書館、コミュニティハウスなどで、ワンコインや無料で参加できる何かに出かけていくことは母親たちは好きなので、そうした機会で地域に目を向けられる何かがあればよいと思う。 　学校の立場からいうと、現在小学校でも中学校でも、学校と社会をつなぐ、社会皆で子どもたちを育てようということがテーマになっている。私たちが受けてきた教育とは全く違い、「開かれた学校」というのを超えて、社会や地域の人とつながり、学校を核とした地域づくり、地域で子どもを育てようということになっている。小・中学校はそういうことを授業に取り入れており、大学生もボランティアで単位がもらえる学部があるようで、よく学校にも来てくれる。また、30代、40代の父親たちも、ただがむしゃらに働いているだけではなく、おやじの会に入り地域の人と一緒にお祭りをしたりして、将来、自分が定年後にどういうことをするかと考えている父親もいるとよく聞く。 　一番難しいのが、終身雇用で勤めてきた50代の方で、定年後にどうしたらよいか分からない、全く地域にも目を向けていないし、町内会との関わりもないという人。そういう人たちに対して、プロボノのように、自分たちのスキルを活かしたボランティアの場所があれば、もっと活躍できるのではないかと思う。昨日たまたま高校時代の男性の友人に会ったが、定年後は自分が住んでいるまちに対して環境面や漁業等で手伝いをしたいと言っていた。普通に働いていてもそういう気持ちがあり、やはり自分のまちを好きになるということがきっかけだと感じた。 **（名和田委員）** 　私もプレイパークでメーリングリストの管理者をしているが、毎日のように、プレイリーダー以外にボランティアで親御さんたちが支えないと開園できない状況があった。福本委員がおっしゃったことはよく分かる。 　また、最近文科省の方針でも、学校を核とした地域づくりが言われるようになり、佐藤委員からも学校運営協議会というお話も出たように、学校と連携していくことが第４期から地福計画の文言の中に記載してある。 　資料４－１の①の方々が②や③に行こうとするときに、一番難しいカテゴリーは、会社人間だった方ではないかということであったが、その辺りはいかがか。 **（佐藤委員）** 　私は定年してから自治会に入った。周りからいきなり自治会長にされて、右も左も分からない状態であった。しかし今、この年になって遊ぶところができて非常に楽しい。その話を、周りの定年になった人たちに伝えて自治会への加入を勧めている。特に男性は定年になるとすることがなくなり、そこから徐々に体調を崩しがちである。自治会で行事があるときには参加を促し、お酒をともにし、多少なりとも役をつけて、皆でやっていこうということである。定年になったら必ず自治会に入るということを周りに勧めるのも一つの方法ではないかと思っている。

（名和田委員）

行事やイベントは一つのヒントであろう。佐伯委員のご発言の中にも、母親はイベントが好きだとあったが、誰でも好きだと思う。私もイベントで無理やり実行委員長をさせられた時は嫌だなと思いながらも、当日は高揚した気分になる。

（福本委員）

約４年前の乳幼児健診のときに、子育て家庭の調査を全区的に実施した。地域のつながりというテーマで回答者のコメントを集計したが、先ほど佐藤委員がおっしゃっていた自分がこのまちで暮らしてよかった、住んでいてよかった、ここに住み続けたいというようなところにつながったのは、やはり声をかけてもらったことが大きかった。挨拶程度のこともあるが、自分に対して子育てのねぎらいの声をかけてくれた、子どもをきっかけに毎日顔を合わせるようになり声をかけてもらえるようになったなど、地域に知り合いができるということは非常に大きなことなのだとその調査を見て感じた。

イベントというキーワードも出てきたが、やりっ放しにせずに地域の方と知り合うきっかけにする、そこをチャンスと捉えてコミュニケーションを取っていくと、今まで地域のグループに所属していなかった層も資料４－１の図の②のほうに吸い寄せられていくのではないか。

先ほどお話が出た生涯学習グループや市民活動について、地域という概念が、自分が住んでいる町内会だけを地域とするのか、区域を地域とするのか、自分が所属する生涯学習の活動をしている場を地域というのか、色々な概念があると思う。自分の町内会だけが地域ではないと思っている方も多く、そういった方たちが自分の住んでいるまちにつながる取組として、関係機関の私たちがつないでいくとか、顔の見える関係づくりというのがキーワードになってくるのだと思う。

（名和田委員）

先ほどの市民活動調査で、生涯学習団体とそうではない団体とでは回答傾向に有意な差があると申したが、地域も同様である。活動範囲はどこかと尋ねると、会員の分布をもって答えている感じである。恐らくそこで地域を意識するようになるというところが、資料４－１の②→③に移行するポイントなのかと、今ご発言を聞いてとても腑に落ちた。

2020年に港南区で実施した調査では、回答数が少なかったので分からないが、活動範囲の狭い団体が減ったことを少し危惧している。また、2001年調査では、自治会ぐらいの範囲で活動している配食グループや、小学校区、連合ぐらいの規模で活動しているグループが多かったが、2020年調査では非常に少なかった。活動グループの専門化が進んだのかもしれないし分からないが、少なくとも今の福本委員のご発言にあったように、地域を意識するという働きかけというのは、特に②→③に向けては重要なのではないかと思った。

（オブザーバー）（健康福祉局地域支援課）

生涯学習のグループで、活動の中身や見る角度によってはすでに福祉保健の取組になっているという団体が多分にあるというお話があったが、②の活動の人たち

	が、自分たちは③の活動しているのだということを意識することが必要なのか、意識していなくてもそういう取組をしてくだされば よいものなのか。そのあたりをどのように働きかけていくのがよいのか、意識することでその活動にどういうプラスがあるのか。現場で見られていてお感じになっているところがあれば、教えていただきたい。 **（生田委員）** 難しい質問である。あまり福祉保健団体だと意識すると、活動内容が萎縮・硬直化するので、それよりは自由にやっていただいたほうが魅力がある。 例えば、高齢者の外出の機会を考えたときに、ケアプラザで行っているデイサービスは、行きたくない層やそもそも介護度がつかずに行かれないケースなど、全ての方の外出の機会にはなり得ない。 約20年前から、地域サロンや高齢者サロンのような概念ができてきたが、高齢者サロンはまさしく福祉保健団体に位置づけられている。地区社協や町内会など色々なところでそうした活動がされており、とても大事な選択肢にはなるが、町内会などに所属しない層の方もいらっしゃったり、もしくは引っ越してきたばかりで仲間がいないなど様々な理由がある。そうすると、趣味の活動や小地域にこだわらない団体など、また違う切り口の団体があれば、そちらは参加するかもしれない。要するに、種類や選択肢は多い方がよい。 自由にやっていただく中で、自分たちでその価値に気づいてもらうことは必要かもしれないが、福祉保健活動になるためにこれもしなさいということは、個人的には言うべきではないのではないかと思う。 **（宇野委員）** 価値に気づくと、もっとやろうという気持ちになり、そこからさらに新たな価値へと目が広がっていくので、大事なことだと思った。 **（名和田委員）** 価値を知るのは大事だが、そこに限定すると逆効果となってしまう。 **（山野上委員）** 私は市民セクターよこはまに所属しており、普段の活動は移動サービス協議会でまさに福祉保健活動を行っている。現在、介護タクシーが増えたり、普通のタクシーでもユニバーサルタクシーができたりして状況が変わってきているが、コロナの影響もあり、外に出る気がなく、自宅にこもっていれば移動のニーズは発生しない。以前は「いつでも、誰でも、どこへでも」と外に連れていくというところを支援していたが、今は逆に移動すると楽しいことがある、楽しいことがあるから移動してみようとつながるようになってきている。数年前くらいまでは1，000万円くらいの事業であったものが、今は150万円程に減ってしまった。これは、サービスが多くできたことや、外出することをあきらめてしまっている人も多いということが関係しているのではないか。 障害のある方も含めて、皆が自分たちの楽しめる活動をしたり、今はスマホ教室やマイナンバーカードを作りポイントをもらおうということを実施している。ＳＤＧｓが流行っているからということで、たまたま同じビルの中に工務店があり、そ

	こから余った壁紙をいただいて置いていたら皆で絵を描き始めて、エコバッグを作り始めた。絵を描き始めたらとても楽しく、そこから掛け軸になっていったり、色々な発展となる。活動が先ではなく、やる気や意欲を刺激するとみるみるうちに広がっていくことを実感しており、移動サービスというのはそろそろ変えなければいけないのではないかと思っている。カテゴリー分けで活動していくのではなく、人が活動するということを重視した支援の仕方や呼びかけ、先ほど、参加意欲を刺激するとそこから広がっていくというご意見があったが、まさにその通りだと現場でも実感してる。 **（名和田委員）** カテゴリーで決めつけるのではなく、刺激を受けて人と人とが結びついて活動するようになっていく、というところがポイントだと感じた。 先ほどの2001年と2020年の調査についてだが、実は2020年調査の傾向として活動の範囲が多様化してきており、従来の生涯学習や保健福祉など、典型的な活動が減っている。複数を選択できる、色々なタイプのものが出てきている。活動を決めつけてしまうと、かえってそうした活動の魅力も限定されてしまうように私も感じた。 **（佐伯委員）** 感想になるが、今までの話を聞いていると、福祉というのは障害者を支援するだけでなく、皆の幸せを考えるという大きな意味があり、中心にウェルビーイングという言葉があるとよいのではないかと感じた。 **（名和田委員）** 最近またウェルビーイングという言葉に新たな光が当たってきている。特定の属性を持った人だけのものではないということだが、それを実際の生活の中で実践に移すのは難しいこともある。 **（宇野委員）** 港北区に約1，300世帯が入る大型分譲マンションがあり、そこでまちづくりの新しい取組を行うプロジェクトがある。小学校３年生～６年生くらいの子ども向けのイベントであるが、不動産会社が考える10の大事なものの一つに地域と関わりを持つことがあり、それに紐づくことを皆で考えてやろうとしている。その事務局の方との話の中で、まずは一回実績をつくることが大事だという話をしていたが、私は実績だけではだめで、次につなげることが大切だと思う。小学生は、ああ楽しかったと終わったら、翌日にゲームなどで遊べば、もうイベントのことは忘れてしまうと思う。大人も同様で、私も仕事が終わってお酒を飲み、はい終わったとなれば良いことも悪いことも全部少ししか残らない。イベントを実施したら、今回何がよくなかったか、自分たちでこれから何ができるのかなどをきちんと振り返り、では次に何をするのかというころまでセットにするという、仕事のプロセスに似ていると思う。そういうことしなければ継続するのは難しいと思った。 **（福本委員）** イベントはきっかけでしかないと思う。いかに参加者がこの団体に居場所として関われるかというところに持っていくのが作戦であり、頑張りどころである。イベ

ントを開いて楽しかったというだけでは絶対次にはつながらない。拠点もイベントしか来ない利用者層のほうが多く、年間の利用者数の約３割が１回しか来ないという方であり、その方たちをどう次の参加につなげるかがとても大事である。そのときに、より丁寧にどれだけ語りかけをして、また来てねというつながりを大切にできるかが大事。10人いて３人が次につながったらラッキーと思う心持ちで巻き込んでいかなければ、地域につながっていかないのではないかと思う。

（名和田委員）

私が議論を振り返って気になっているのが、時間がないという話である。子育て中はもちろん、現役で働いているとき、その他様々な理由で時間がない。やりたいと思ったことを全部やろうとしたら24時間では足りないのが普通であるが、そこをネックにしないような工夫ができないか。いつも資料４－１の図①→②、②→③に移りませんかというときに、忙しいからという理由で断られる。忙しいのではなく、そこに優先順位を置くと楽しくなりますよとか、有益になりますよとか、そういうことを伝えたいが、なかなか難しい。忙しい、時間がないという問題はどのように克服したらよいのか。ご意見があればお聞かせいただきたい。

（宇野委員）

地域貢献したいという気持ちはあるという前提か。

（名和田委員）

アンケートを取るとかなりの人がそう答えている。今はできない、忙しいからという回答である。

（佐藤委員）

地域活動をしていても、朝から晩までしているわけではなく、そんなに忙しいものではない。ただし、今は母親は勤めに出ている人も多いので、とても大変だと思う。子どもがいて給食がなければお弁当を作らなければならない。今後、ハマ弁に市長は力を入れて、そうした手間を少しずつ省くような形で、皆に地域を守ってもらうような支援を市でもしていかなければいけないのではないかと思っている。

地域では朝から晩まで活動していることはないので、確かに色々なものが集中することもあるが、サラリーマンであっても、年間を通せば何とかやれるのではないかというのが私の過去の経験である。

（名和田委員）

私も組長をしており、実際には妻が活動しているが、それほど時間を使っているわけではなく、なぜ皆が嫌がるのか不思議でたまらない。

（宇野委員）

サラリーマンで大変忙しい人はほんのわずかだと思うので、１か月あれば数時間は捻出できるはずである。そこをうまく拾うことができればよい。

（福本委員）

いかに自分が楽しいか、だと思う。先ほど生田委員もおっしゃっていたが、自分がわくわくするとか楽しんでやっていることが結果的に福祉活動につながっていたというほうが絶対よい。誰かのためにやるとなると、それができなくなったときに、できなかった自分に対して責任感が乗りかかる。そうではなく、楽しんでやってい

たら結果的に何かのためになっていたというほうが、忙しい人たちには合っている方法なのかという気がする。

（生田委員）

大変忙しい方も地域貢献活動をしたいという意識は持っている。しかし、その活動がとても大変なことだと思っておられる。福祉保健活動というのは、例えば自分が送迎で運転をしたり、子育てサロンに行って子どもと一緒に遊ばなければいけないのではないかと考えている。しかし、例えばウォーキングの会をしようというときに、ただ一緒に歩いてくれて、たまたま遅れた高齢者をちょっと見てくれる程度でよい。それくらいであれば、元々ウォーキングをしている方にしてみればウォーキングをしていただけとなるが、実際には貢献活動をしている。もっとハードルが低いと言ったら変だが、先ほども言ったように、楽しんで何かをやっているついでに地域貢献ができているというところが分かればよいと思う。

ケアプラザでは現在、高齢者のスマホ教室がブームであるが、高校生が少し参加してくれている。高校生本人たちにはボランティアの意識はないが、高齢者たちにしてみれば、スマホの使い方を教えてくれるだけで大きな戦力である。

先ほど言ったように、地域貢献はすごく高尚なもので、すごいことをしなければいけないものではない。おっしゃる通り、ずっと仕事をしている人はおらず、ストレス解消ではないが自分でも絶対何かをしている。そのようなものに少しつけ足せば十分、それは貢献だということを分かっていただくことと、そのような場を私たちがどう作るかというところが課題だと思う。

（名和田委員）

コーディネーターの役割も大きい。

（宇野委員）

そうですね。簡単にできるものだということを知らないのだと思う。そういうことはどこで気づくのか。今までの人生で、大学くらいまでは気づくタイミングがなかった。

（生田委員）

敷居がとても高いのだと思う。先ほどイベントが打ち上げ花火で終わってしまうという話があったが、皆さんが知る機会としては、イベントというのは割と有効になる。

（名和田委員）

忙しい、忙しくないは相対的な問題でどこに優先順位をつけているかということではあるが、先ほど子育て世代が大変だという話があったが、そこについてはある程度戦略や配慮、工夫が必要であり、その観点ではいかがか。

（福本委員）

佐藤委員の神奈川区は、かめっ子の活動が地域に色々と点在しており、忙しい、時間がない、疲れている母親もやはり自分が助けてもらいたくてそういう場に行く。そこで定期的に関わることで、その後さらに疲れている母親が入ってきたときにきちんと助ける側に回っていく。本当に仕掛ける側のコーディネート力になってくるが、そこをより丁寧にすると、例えば親子サークルを立ち上げるキーマンになっ

たり、学校のＰＴＡの活動を引き受けてくれる母親になったりとか、力を持っている母親がいる。母親の力をエンパワメントしていくことが大事なところなのではないかと思う。

（佐藤委員）

私の地域では、地域の人が小学校の掃除をしており、その中で子どもに掃除のやり方を教えたりしている。地域の人が一生懸命子どもの面倒を見てくれていて、そういう姿を見て、母親も子どものために地域の人が色々なことをしてくれていると感じるのだと思う。そういうＰＲみたいなものも必要かと思う。

そうした関係性ができると、学校や母親も気を遣ってくれて、子どもたちが年に１回地域の通学路の清掃や公園の清掃に来てくれる。ちょっとしたことで、何かを見つけて、お互いにやる、そういうことが大事だと思い、この活動を何十年と続けている。

（福本委員）

シニアの方と知り合うきっかけも、そうした機会が初めてということもあるので、お互い様だと思う。助けてもらった分、シニアの方たちが困っているところを手助けするという、そこの連携が生まれてくるとなおよい。多世代のそういう交流の場が増えればよいと思う。

（名和田委員）

ケアプラザや区社協、あるいは子育て拠点とか、そこにいる専門職、あるいは地域の方も同じだと思うが、コーディネートが重要かと思う。

その意味で、地区センターも同じように役割を果たせると思う。地区センターはコーディネーターを置くだけの予算を与えられていないので、そこはケアプラザと比べるとかなりハンディになっている。しかし、2020年港南区調査では、ケアプラザや社協ほどではないにしても、地区センターに相談している人は結構いて、相談相手として機能している。もう少し自覚的にそういう役割を発揮してもらうと、もっと地域に広がっていくのではないかと思う。

（佐藤委員）

地区センターは自主事業を多く実施しており、そこで地域とのつながりがある。ケアプラザのようにはいかないが、パソコンやスマートフォンも地区センターで教えてくれているので、その辺りである程度地域とのつながりは深い。

（名和田委員）

そうですね。それをまた地域の方も一緒に支えてくださっている。地区センターは子どもたちが集まる場にもなっている。

（佐藤委員）

図書館や子どもたちを遊ばせる場所もある。地域の中核になってくれているところである。

（名和田委員）

ぜひ市民局にもそういうことをご検討いただけるとありがたい。

（オブザーバー）（市民局地域活動推進課）

地区センターはもちろんだが、市民活動支援センターについても、中間支援組織

	としてコーディネート力をより発揮できるように力を入れていこうと事務局でも話している。まさに趣味の活動を地域に還元していくというところで、うまく自治会町内会などにつなげられるとよい。 **【議事３】まとめ** **（名和田委員）** 　最後に締めくくりの時間になるが、さらに意見したいことや、言い忘れていたとなどあればぜひお願いしたい。全く違う観点での意見でも構わないのでいかがか。事務局から聞いてみたいことや、意見はあるか。 **（事務局）** 　資料４－１の図に書いた「支援が必要な人」というのは、常に支援をされる側ではなく、障害のある人や年齢を重ねた方が出番をもって活躍ができるということを、支援機関がどのような考え方を持って地域に働きかけていくことで実現していくのか。可能な範囲で体系化しながら、計画にも盛り込めればと願望も込めて考えている。各団体で何か取り組んでいることや事例等があれば、教えていただきたい。 **（宇野委員）** 　私の祖父の地域には老人会のようなものがあり、カラオケ大会や折り紙など、普段は決められたプログラムを行っていた。そこで、祖父が以前にお茶をしていたことが皆に伝わり、お茶の入れ方を教えてほしいということから、祖父が教える側として関わるようになった。そうした事例を皆で共有して、せっかくなら皆で話し合い、誰かがヒーローになれるようなイベントをやってみようということも、もしかしたらできるのではないかという気がする。 **（佐藤委員）** 　資料４－１の図では、この人は支援が必要な人だということがはっきりしている。このような場合はよいが、実際には言えない人がいる。その人たちにも、自分から声をあげれるようにしてあげることも大事な仕事だと思っている。非常に時間もかかり、そのために自宅訪問をしたり、郵便ポストの見守りをしたり、先ほど申し上げたような集まりの場をつくるっている。手を挙げた人だけを支援をしていくということではなく、それを越えていくためには、皆が一緒になり、関係機関と一緒にやらなければいけないと思っている。 　現実にあった問題として、個人情報が壁になって進められないということも起きてくる。私は常々、「プライバシーは守るが、個人情報は大いに活用しなければいけないものだ、そうしなければ福祉を遅らせることになる」と言っている。手を挙げられない人がなかなか見つからない、手助けができないということが現実には起きているので、そのようなことにも気をかけながら、小さな福祉、地域での高齢者福祉について、非常に難しい、時間のかかる問題だと思うが、やっていきたいと思っている。 **（山野上委員）** 　本日の午前中に、区民活動センターや、自治会町内会にはすばらしいリーダーがいるが、なかなか地域とのつながりができないという中で、私たちはそのつなぎ方の

	ノウハウを持っており、そもそも20年もの間、中間支援組織として市民活動を支援してきたという話を今更のように話をしていた。このような事例がありますよ、隣の区ではこのような素敵な事例があったのでどうですかとお誘いをしたり、そういう現場の情報提供をして、人と人をつないでいくという原点にもう一度戻りたいと話していた。今日の分科会で、地域の皆さんのお悩みを聞いて、是非、皆さんの活動のお手伝いをさせていただきたいと思った。 **（名和田委員）** 港南台で実施しているキャンドルナイトの実行委員に、ある身体障害者の方がずっと参加してくれていた。その方は体の力の低下により、今後は実行委員に参加できないと言ってこられた。このケースを事務局の問いかけとの関係でどう整理すればよいか悩んでいるが、やはり私たちは彼に救われたと思う。彼は支援を必要とする人かもしれないが、彼の持っているセンスや力を活かすためにどうすればよいか、我々は考えるチャンスを与えられて、彼の生き様そのものから学ばせていただいた。そういう困難な立場にある人に教えてもらっていたということの認識と、そこからきちんと一般化して学ばなければいけないと強く思う。 **（生田委員）** 私はとても単純に考えていて、障害者だから、高齢者だからとは考えていない。単純に困っていることがあり、本人が訴えることもあれば、周りから見て何とかしなければと思うこともある。また逆に、地域には自分はこういうことができますよと言ってくださる方もいる。それはすごい技能を持った方かもしれないし、障害のある方でも高齢者の方でもたくさんいらっしゃった。 特徴的な話をすると、今は放課後等デイサービスの制度ができたため下火になったが、私どもではずっと中・高校生ぐらいの個別支援級の子どもたちの居場所や様々な取組を行ってきた。ケアプラザの10周年のお祭りで、皆でダンスを披露するとなったときに、その子どもたちが自分たちも踊りたいと言ってくれた。子どもたちは何かを提供するという意識はなかったが、ケアプラザとしては一つ出し物が増えて、皆も喜んでくれてよかった。 また、以前高齢者サロンで、誰か昔の話をしてくれませんかと尋ねたら、普段はあまりしゃべらない方が、戦争の話等をしてくださった。 障害者だから、高齢者だからというよりも、どちらかというと、やりたい思いをキャッチして、どこに活かせるのかを考えることが重要ではないかと思う。無理にお互いさまの関係というよりは、思いを拾ってそれをきちんとつなげていければよいのではないかと思う。 **（山野上委員）** 特別支援学校の卒業生である知的障害者のグループで、はっぱオールスターズという団体に私は関わっている。その子どもたちは、学生時代はなかなかルールが守れないこともあったが、興味が進むととても一生懸命頑張れるし、10数年たっているが卒業後様々なところで活動をしている。好きな歌を歌うことで地域に呼ばれて、先日市役所のフォーラムでもステージをやらせていただき、それを見て皆が元気になった。

	その団体が数年前から、イベント団体ともにミュージックのフェステバルを行うようになり、一緒に取り組むことで、そのイベント団体の方も障害の方を受け入れるという意識がみるみる入ってきた。スタッフたちも皆、障害のある人と一緒にやるのが当たり前なので、できないところはどう手伝えばよいかを現場で作っていく。今年、そのイベント団体が、芸術団体でありながら福祉関係の賞を受賞することになった。はっぱオールスターズがそこに関わり、生の体験で一緒に音楽を楽しんでいた中で伝えてこられた。そうした団体が福祉の感覚を持てたというのが、当事者の力だったのではないかと思う。このような事例はたくさんあると思うので、ピックアップして広めていくことができれば、もっと身近になっていくのではないかと思う。 **（名和田委員）** そろそろ定刻になるが他にご意見はあるか。 これで話し合いを終了し、進行を事務局にお返しする。 **（事務局）** 本日の議事録については、発言者のお名前と内容の要旨を記載したものを事務局で作成し、ホームページで公表する予定となっている。 今後の予定については、次第に書かせていただいているとおり、第２回横浜市地域福祉保健計画横浜市地域福祉活動計画検討会が令和４年11月15日午前10時～正午まで、会場は横浜市健康福祉総合センターの８階の会議室で開催する。案内については、また改めて発出させていただくので、ご確認をお願いしたい。 以上により、本日の会議を閉会とさせていただく。本日はお忙しい中ご出席いただき、ありがとうございました。 **閉会**
資　　料	○令和４年度第２回 横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会 分科会１　　次第 ○横浜市地域福祉保健計画　策定・推進委員会　分科会１委員名簿　　（資料１） ○第１回分科会　ふりかえりについて 地域の課題を解決するための団体・組織の連携協働について （第１回分科会まとめ）　　（資料２－１） 参加・参画・裾野の広がりなどについて （第２回分科会の意見交換に向けて）　　（資料２－２） ○現状と課題について　　（資料３） ○意見交換シート　　（資料４） ○地域共生社会とは　　（参考）